

衛生学者としてのナイチンゲール

—感染・統計・組織改革を一連のものとして—

金井一薫(ナイチンゲール看護研究所, 東京有明医療大学看護学部 学部長)



略歴

1969年 東京大学医学部附属看護学校卒業、1976年 慶応義塾大学文学部卒業、1987年 ナイチンゲール看護研究所設立、1994年 日本社会事業大学博士前期課程修了、1996年 KOMI理論研究会設立。1998年 日本社会事業大学助教授を経て、同教授。2004年 社会福祉学博士号取得、2009年 東京有明医療大学看護学部学部長。

演者紹介

ナイチンゲール研究の第一人者—金井一薫先生

金井一薫先生は、ナイチンゲール看護研究所の理事をされており、東京有明医療大学看護学部学部長でいらっしゃいます。

今から20年前、私は看護師の仕事に自信が持てずに悶々としていました。そのとき1年間、仕事を休んで学校に行く機会を与えられ、そこで金井先生と出会いました。金井先生は、とても熱いハートでフローレンス・ナイチンゲールのことを語ってください、看護職の方でしたら皆さんお馴染みの『看護覚え書』の中に本物の看護が存在していることを明確に解き明かしてくださいました。私は先生のお話を聞いて、目からうろこ、本当に勇気と自信を与えていただき、生涯の中でも忘れられない先生のお一人なのです。

先生は、フローレンス・ナイチンゲールのご研究を続けて35年、ナイチンゲール研究の第一人者でいらっしゃいます。今日はナイチンゲールのお話を通して、私たちのやるべきことの本質を十分語っていただきたいと思います。そして、私たちの足元をしっかりと見直す機会にさせていただけたらと思います。

菅原えりさ(日本赤十字社医療センター 院内感染対策室)

今回は、ナイチンゲールの衛生学者としての姿、とくに感染、統計、それらにまつわる組織改革を成し遂げた人物であるところを詳しくお話させていただきます。

そのまえにまず、ナイチンゲールの人物像からお話しいたします。フローレンス・ナイチンゲールという女性は、有名すぎて知っているように思っていますが、イメージばかりが大きく膨らんでいます。看護界にも神話化されたナイチンゲール像が浸透しています。真のナイチンゲールの姿を知っていただいて、それらを払拭していただきたいと思います。

ナイチンゲールとの出会い

卒業して間もなくのころ、私は卒業校の図書館で小さな本を1冊借りました。『ナイチンゲール書簡集』というナイチンゲールがお弟子さんたちに向けて書いた書簡集で、ページをめくると、私にとっては衝撃的な文章が並

んでいました。

「看護の仕事は、快活な、幸福な、希望に満ちた精神の仕事です。犠牲を払っているなどとは決して考えない、熱心な、明るい、活発な女性こそ、本当の看護婦といえるのです」。

ナイチンゲールは1860年にナイチンゲール看護学校を熱望の末つくりました。その後、毎年卒業生を送り出し

ますが、晩年になってからその卒業生、在校生に向けて一年に1回、講演録と称して手紙を出しています。その手紙の束を翻訳したものが『ナイチンゲール書簡集』です。

在校生や卒業生に向けたナイチンゲールの熱い思いが語られているわけですが、この一節に私は特に関心を持ちました。一生看護師をしていたと思われるナイチンゲール、特に日本では白衣の天使、自己犠牲の精神を強いたナースとして有名です。それは悪いことではないのですが、「犠牲を払っていると考えるところからいい看護は生まれぬ」という言葉に大きな衝撃を受けたのです。ナイチンゲールのイメージは誤解されたまま膨らんで、それが固定してしまっているのではないかと思いました。このとき以来、本物のナイチンゲール、真実のナイチンゲールの姿を知りたいと思いました。

それは卒業後間もなくのころで、まだ看護界、また日本国の中にも本物のナイチンゲールを語る人はいませんでした。彼女の書いたものがどれくらいあるのか、真実としての彼女の生い立ちはどうなのか、全く未知でした。まずはナイチンゲールが書いたもの、ナイチンゲールについて書かれた伝記類を、個人的な趣味の世界で調査し始めました。

当時はようやくコピー機ができ始めたころで、1枚50円でした。ラーメン1杯50円の時代でしたが、見つけた文献はほとんど全部コピーを取りました。それで送料が吹っ飛んでしまうのではないかと心配しましたが、そんな思いをしてナイチンゲールが書いたもの、ナイチンゲールについて書かれた文献を探し出していきました。これが私とナイチンゲールとの出会いから始めた研究の作業です。

ナイチンゲールの真実 —神話化されたナイチンゲール像

①クリミア戦争で敵味方なく看病したという逸話

そこで初めてわかった事柄がありました。それは“神話化”されたナイチンゲール像が世界中で一人歩きしているということです。特に小学生や中学生が教わる社会科の教科書の中でも「クリミア戦争に従軍して看護を打ち立てた」、ここまではよろしいですが、「敵味方なく看病した」と書かれています。これはどうやら嘘のようです。従軍したのは本当ですが、敵味方なく看病したというのはいかなる出来事でもありません。

クリミア戦争は、トルコとロシアのエルサレムをめぐる戦いで、トルコにイギリスとフランスが加担して始められた戦争です。したがって戦地はクリミア半島ですが、ナイチンゲールほか38名が赴いて看病したのは、戦場ではなく黒海をまたいだ対岸のトルコ領地のスクタリの兵

舎病院でした。

クリミア半島で戦闘が行われ、傷ついたイギリス兵士たちは数百人単位で黒海を渡ってスクタリの地に運ばれてきました。スクタリの地で亡くなった兵士は2年間で約2,000人ともいわれていますので、数万人に上る負傷者を看病したことになります。

クリミア戦争の最後にはナイチンゲールもクリミア半島に赴きますが、赴いた直後にクリミア熱という感染症で倒れ、その直後に戦争が終わったのです。ですから、クリミア半島の戦地で敵味方なく看病したということはいかなる話でもありません。

②一生看護師をして、患者さんのために身を尽くしたという逸話

ナイチンゲールは1820年5月12日生まれ、亡くなったのは1910年8月13日、90年という長き生涯を終えた人です。いまでは90歳という数字にはそんなに驚かないですが、当時のイギリスや日本は人生50年、あるいはもっと短いでしょうか、そういう時代の中で90歳まで生きたのはすばらしく長命だったと思います。その90年の生涯のなかで、看護師のユニフォームを着て、戦地も含めて現場に立ったのは3年弱しかありません。

1854年、クリミア戦争に赴き、1856年、36歳のときに帰ってきます。34歳から36歳の出来事でした。36歳で帰還してから90歳の生涯を終えるまで、二度と現場に立つことはありませんでした。ほとんどベッド上での生活を余儀なくされました。看護師人生は約3年間であるというのが事実です。

③“看護の精神＝犠牲の精神”がナイチンゲールの精神という逸話

ナイチンゲールは、看護師というのは犠牲の精神が大事で、白衣の天使であるということは一言も言っていません。また、看護は心が大事であるということも強調していませんでした。ナイチンゲールが強調したのは、「生命の法則をきちんと見極めたうえで看護を提供しなさい」ということです。いまでいう、まさにエビデンスのある看護です。どの文章を読んでもそれが貫かれていました。ですからナイチンゲール精神を一言でいうと、「生命の性質に見合った看護をして、人々の暮らしと健康を守れ」ということになるかと思っています。

④ナイチンゲール誓詞という逸話

若い方は知らないと思いますが、日本の看護の世界に生きた人なら誰もが知っているナイチンゲール誓詞、「われはここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん」という文章があります。これを知らない40代以上のナースはもぐりであると思えるぐらいに学業の日課を通して日々唱えさせられ、キャッピング、戴帽式のときにも活用し

てきた看護界では大変有名な「誓詞」ですが、これも、ナイチンゲールがつくったものではありません。

これは1893年に、アメリカのデトロイトにあるファランド看護学校の校長先生がつくったもので、ヒポクラテス誓詞を参考にしてつくられたといわれています。戦後GHQが日本に入ってきて看護の指導をしましたので、おそらくGHQによって翻訳されたものであろうと私は思っています。それが戦後の看護教育の中で、ナイチンゲールがつくったかのように教え込まれて、現在に至っています。

いまでも日本のナースたちには、ナイチンゲール誓詞はナイチンゲールがつくったと思込んでいる方がたくさんいます。私は個人的に神話化されたナイチンゲールを何とか塗り替えるべく、自ら本物のナイチンゲールに出会いたいという一念で、ナイチンゲール研究をしました。

ナイチンゲールの生涯

ナイチンゲール家は上流階層の中でも上位3%に属し、全く仕事をしなくてもあり余るお金が手に入る階層でした。ナイチンゲールの両親は結婚してヨーロッパ旅行に出かけます。当時のイギリス人はヨーロッパに渡って新婚生活を送るのが流行っていたらしく、お金持ちでしたので3年以上ヨーロッパを旅しています。大変気に入ったのがイタリアだったようです。ナイチンゲールには年子のお姉さんがいて、ナポリで生まれたのでナポリの呼び名の「パーセノーブ」という名前がつけられました。次女のナイチンゲールはイタリアのフィレンツェで生まれて、「フローレンス」と名づけられました。彼女は5月12日生まれ、この日はいまや世界中で「看護の日」と名づけられています。

■ナイチンゲールの生い立ち



図1

図1は晩年のお父さんのエドワード・ナイチンゲールです。



図2

図2は若き頃のお母さん、ファニー・スミスです。



図3

図3はお姉さんとナイチンゲールです。当時はまだ写真が一般的ではありませんでしたので、大きな家の壁には自分たちの肖像画を描いてもらって掲げておくのが一般的でした。

図4はお父さんが自ら設計してつくらせたという北の館で、リー・ハースト荘という名前がついています。しかしお母さんは北の館は部屋が20しかないし、寒いし、ロンドンから離れているし、社交界にはこの家を使うのは難しいということで、南の館を買います。結果的にナイチンゲール家は春と秋の社交シーズンは

ロンドンに出て社交界で過ごし、夏はリー・ハースト荘、冬は南の館で過ごすという生活をしていたといわれています。

図5はお姉さんのスケッチです。非常に大きな館であることがわかります。

図6は当時ナイチンゲールが使っていた部屋です。ナイチンゲールが90歳になるまでにこの館は人の手に渡りました。ついこの間まで老人ホームとして使われていました。

図7は南の館です。現在は学校に使われています。売り払われたときはボーイズスクールとして使われていて、生徒たち120人が寝泊りできるという大きな館でした。17世紀のお城をそのまま買い取り、中を少し改造して使っていたようで



図4



図5

す。

図8は南の館の近くにある両親が眠るセント・マーガレット教会です。ナイチンゲールはウェストミンスター寺院にまつられるはずでしたが、彼女は遺言に、自分の亡骸は元兵士たちに担ってもらって、セント・マーガレット教会の墓地に両親と一緒に眠りたい、そこには小さなお墓を立ててほしいと書きました。ひときわ大きいのですが、名前を刻んでほしくないということは守られて「F・N」とだけ刻まれています。

17歳になると社交界デビューが待っています。当時のイギリスのお金持ちの男子たちは、大陸に渡って2年間ぐらい教育の総仕上げをします。ナイチンゲールの父親は娘2人に男の子と同じような非常に高いレベルの教育を受けさせます。そして帰ってきたら、当時はビクトリア女王に謁見が許されて社交界デビューを果たします。そのころ、ナイチンゲールは看護師になりたいと思いますが、上流階層のお嬢様が看護という世界に足を踏み入れることは許されませんでした。

当時“病院”という施設はありましたが、それは最下層の人たちが入る収容所でした。上流階層の人たちは自宅に医師と看護師を迎えて、小さな手術でも全部自宅で行いました。いまでいうと訪問診療、付き添い看護が当たり前だった時代です。“病院”は上流階層とは全く縁のない世界でした。



図9 「酔いどればあさん」といわれていた1800年代のナース

病院自体が不潔の巣窟になっており、病院に入ったために感染症で亡くなっていくため、死亡率はものすごく高かったはずですが。上流階層の人たちが看護師になろうと思うはずもない場所でした。病院にはナースという存在がありましたが、彼女たちは教育を受けておらず、たぶん言葉もきちんと話せないような人で、もちろん文字は書けません。そういう人たちが看護に当たっていました。つまり貧困者による貧困者の看護というのが実態です。

1800年代前半の一般的なナースたちは酒好きであると風刺画ではよく描かれています。「酔いどればあさん」といわれますが、患者さんはびっくりという感じです(図9)。

その中でナイチンゲールは看護改革を目指していきます。

彼女は看護という世界に思いをはせ、研究し、看護師になりたいという熱い思いを抱くのですが、両親、お姉さん、親戚中から大反対されます。なぜそんな世界に入るのか理解できないとかなり強硬に反対され、30歳を過ぎるまで全く外の世界、特に看護の世界と接近することを禁じられていました。ちなみに、ナイチンゲールは30歳になるまで自分の髪をとかしたことがありませんでした。メイドさんが全部やってくれるのです。足を足台に乗せれば靴を履かせてくれたというお嬢様です。

しかし30歳を過ぎても、ナイチンゲールはまったく意志を変えておりませんでした。何とか看護師として自己訓練したいという思いがあり、親しい方の勧めでドイツのカイザースヴェルト学園、フリートナー牧師のもとに行きます。3ヵ月ほどの訓練を経てイギリスに戻り、チャンス待ちました。

初めてめぐってきた看護の世界、病院の世界での仕事は、ロンドンのハーレイ街の淑女病院における総監督でした。1853年、ナイチンゲールは33歳になっていました。

ハーレイ街の淑女病院は、女性だけが患者として入る小さな施設でした。総監督というのは役割としては病院長兼事務局長兼看護部長です。経営的に傾いていたこの病院を1年間の契約で改革を行います。いまのナース



図6



図7



図8

コールの原形、エレベーター、給湯設備等々、ナイチンゲールがこの1年間で発案したこと、考えたことはたくさんあります。

そしてナイチンゲールは請われてはいないのに自分を雇ってくれた委員会に報告書を提出しています。この報告書はナイチンゲールが病院監督に就任し、経営主体である貴婦人委員会に宛てて看護管理、病院経営について記した3ヵ月ごとの報告書、計4回分のことです。どのようなことが行われたか、どのような成果があったか、経済的にはどうなのかをすべて書き残しています。ナイチンゲールは病院管理に対して優れた感覚と実践をこの中で果たしていききました。1年間で完全に黒字にしました。そこで行われた看護の本質、実践がこの四半期ごとの報告書4回分に書き残されています。これは翻訳されていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

ナイチンゲールはその当時、病院経営、病院管理だけに当たっていたわけではありません。実際に看護も展開していきます。慢性期の看護は当たり前できていました。急性期看護もナイチンゲールは得意でした。さらには終末期の看護のあり方に至るまで、この報告書には記載があります。優れた管理者、リーダーとしての資質を当時内外に示したことが、これで証拠づけられています。

この1年間の体験の最後のところでクリミア戦争が勃発し、1年の契約が切れたのでクリミア戦争に従軍した

いと申し出て辞職しています。クリミア戦争における看護管理、病院管理、組織改革にこの1年間の体験が生かされていくことになります。その意味ではハーレイ街の臨床体験は、ナイチンゲールにとって大きな意義を持っていました。

しかし、クリミア戦争から帰ってきたときには、すっかり衰弱していました。最も厳しい条件の中で働き続け、睡眠時間は3時間を切る生活が2年間続いたといわれています。

従軍中、病名はよくわかりませんがクリミア熱といわれている感染症に罹患し命を落としそうになりますが、救われて戻ってきました。帰国後はベッド上の生活を余儀なくされ、50年間近く、ほとんどロンドンにある大きなマンションで、メイドさんが4人、男性の執事が1人つくという暮らしをしていました。もちろんお金は全く心配のない生活だったようです。

今年(2009年)になって私は改めてナイチンゲールの伝記を読み直し、寝たきり生活の50年間とは何だったのかという目で調べ直しました。信頼の置ける伝記が二つあります。イギリス人が書いた2冊の伝記で、二つとも翻訳されています。一つは3巻で、もう一つは2巻という分厚いナイチンゲール伝です。

私なりに今年気がついたことは、この50年間、非常に激しく仕事をしていて、とても外で仕事をする時間はな



図 10



図 11



図 12



図 13

図10はクリミア戦争当時のナイチンゲールです。大変ひたむきな顔をしています。

図11はナイチンゲール看護学校(左、7階建)です。30年ほど前の写真です。ロンドン、テムズ川沿いにビッグベン、国会議事堂があり、その向かいにありました。その後ロンドン大学に吸収されて、現在はありません。この跡地にナイチンゲール・ミュージアムが建てられています。

図12はナイチンゲール看護学校の校章のデザインです。病院の中に教会があって、そこでお祈りをするときに膝が痛いので膝あてに使うクッションにクロスステッチされていました。

図13はバッキンガム宮殿をバックにしながら広場をまっすぐ歩いていくと左側にウォータールー広場があり、そこに戦勝記念碑が立てられていて、大変高い台座の上にナイチンゲール像があります。

かったということです。現代風にいうと、ナイチンゲールの自室はシンクタンクでした。自分で政府の勅撰委員会等もつくりあげ、特に兵士たちの健康、陸軍病院の組織改革、植民地のインドにおける衛生改革というテーマに取り組んでいきます。政府を動かさなければいけない、法律をつくり直さなければいけないという中で、彼女はシンクタンクのような仕事をしていきます。

調査票を作成し、人に頼んで調査をし、それを分析し報告書を書くという生活に明け暮れます。その量たるや膨大なもので、「陸軍の衛生改革」というテーマに関しては、政府に出した報告書は2,000ページにも及びます。つまり、寝たきりだったというのではなく、とても外で仕事をする時間はなかったというのが実態だったようです。

80歳を過ぎたころからは目が見えなくなって、完全な寝たきり生活となります。それから約10年後、1910年8月13日に亡くなりました。来々2010年が没後100年です。

ナイチンゲールの手紙

ナイチンゲールはたくさんの文献を書き残しました。特に手紙類は大量に残っています。かつて私はナイチンゲール研究のために、特に手紙類の調査に行きました。なんと厚さが10cm以上のバインダーに165巻、すべて完璧に残されていました。いかにたくさんの手紙を書いたかがよくわかります。ファイル165巻、しかも極大の大きさのフォリオ判というバインダーですから、大変な量が

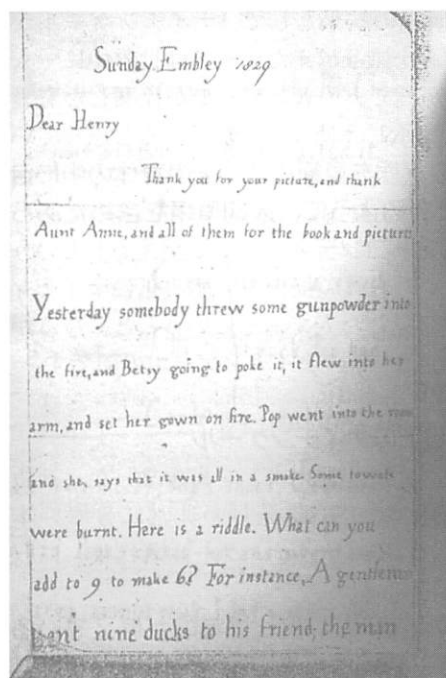


図14 9歳のときの手紙

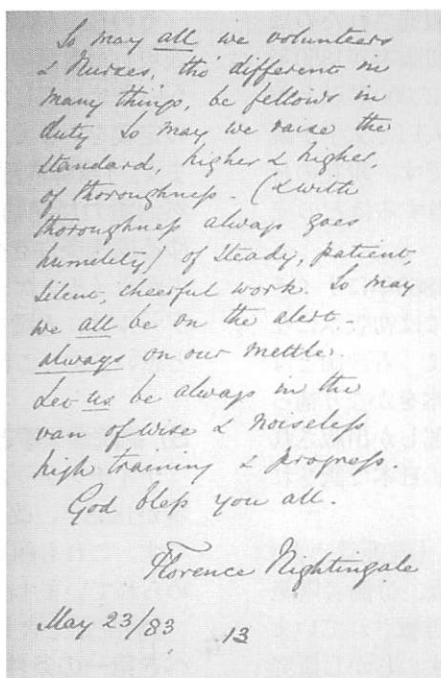


図15 63歳のときの手紙

残されていることがわかります。

図14は1829年、従兄弟のヘンリーに宛てた9歳のときの手紙です。ナイチンゲールの手紙は不思議なことに幼いころから晩年までよく残されています。亡くなったあと、政府がナイチンゲールからもらった手紙を保管している人は寄付してくださいと呼びかけたところ、ものすごくたくさん集まり、宛名別にファイルされました。

図15は63歳のときの手紙です。子ども時代から見ると、ずいぶん大人の筆跡に変わっていることがわかると思います。

ナイチンゲールの業績

クリミア戦争に行って、すばらしい活躍をただけでは伝記に残るだけで、看護界、ことに21世紀の私たちの仕事にそんなに大きく響くものではありません。しかし、研究を重ねていくと、ナイチンゲールが書いたもの、考えたことを継承せずして看護の世界は継続できないという確かな信念を持ちましたので、そのあたりをいくつか紹介いたします。

ナイチンゲールの業績の大きな部分に“感染”対策があります。ナイチンゲールは感染を正しく認識させ、社会全体をきれいにしていく“衛生”というテーマに取り組んでいこうと決心したので、ナイチンゲールの業績の主軸になるのは感染対策だったといえます。

ナイチンゲールは、33歳になって初めて看護の世界に入っていきますが、2年間のクリミア戦争のあと、ずっと自室に閉じこもるような生活、ベッド上の生活を余儀なくされますが、生涯で150点もの印刷文献と1万2千点を超える手稿文献、手紙類を書き残しています。この数たるや全集にすると印刷されたものだけで約60巻はできるだろうといわれています。しかもすべて完璧に保存されています。

社会学者のビショップ氏は、ナイチンゲールの150点の文献を内容別に9つにカテゴリー化しました(表)。これらの文献はすべてきれいに保存されており、大英博物館でいたい閲覧できます。

このうちの50編近くが日本語に翻訳されています。ナイチンゲール研究者は、ほとんど日本にしかおらず、ナイチンゲール研究は日本がダントツ第1位をひた走っています。その割にナイチン

表 150 点の印刷文献

1. 看護についての文献：47 編
2. 英国陸軍についての文献：11 編
3. インドおよび植民地の福祉について：39 編
4. 病院についての文献：8 編
5. 統計学についての文献：3 編
6. 社会学についての文献：9 編
7. 回顧録と献辞：8 編
8. 宗教および哲学についての文献：4 編
9. その他の文献：21 編

ゲールの神話化された側面が直らないのは、不思議な感じがします。

ナイチンゲールの文献を読んでいくといくつかの顔が出てきます。それらについてお話しいたします。

1) 著述家としてのナイチンゲール

まず150編の印刷文献、ファイリングされた手書きの文献が165巻もあることから、一つ目の顔は、著述家としてのナイチンゲールとなるかと思えます。これだけのものを書くのは大変なことで、しかも当時印刷、出版するということは非常にお金がかかることです。

その代表作は、まず看護界では『看護覚え書』(Notes on Nursing)を挙げなければいけないと思います。『看護覚え書』は、当時のベストセラーの一冊だといわれています。『看護覚え書』は初版本、改訂版、労働者階級版と三つの版を重ねています。しかも短期間に版を重ねているところが特徴です。

最初は1859年12月に出版されました。販売されたのは1860年になってからだと思われませんが、初版本が1859年の12月です。発売されてから約2ヵ月で15,000部以上が売れたといわれています。これは当時の人口と文字が読める人口を考えるとものすごい売れ行きです。現在の日本でいうと100万部のベストセラーに相当するほどの売れ行きだったといわれています。

ところが不思議なことに、発売された1860年にナイチンゲールは改訂版を出しました。改訂版には初版本にないものがたくさん追加されています。特に「看護師とは何か」という補章がついていたり、初版本をかなり補ったものが出ています。しかしこれは2,000部しか出版されておらず、その後再版はされていません。日本で訳された現代社版は、この改訂版です。

その後、ナイチンゲールは多くの人に「看護覚え書」を読んでもらおうと考えたらしく、第3版、労働者階級版を出しました。これは安価で、何度も再版されていますが、今日までかなりの版を重ねています。しかし研究者の目から見ると、第1版、特に改訂版を超えるものは

ありません。

『看護覚え書』のすばらしさは、“What it is and what it is not(看護であること、看護でないこと)”というサブタイトルが表現しています。「行われている看護が、はたして看護であるかどうかを判定せよ、判定する物差しがなければいけない」と読みとることができます。

終わりの文章に「自分たちが行っている看護がはたして本当の看護なのかどうかをきちんと見極めなさい。この本を読めば看護であるものとならないものがわかりますよ」と記されていますので、私はこれを物差しの発想と捉えました。看護を展開していくときには、その結果を評価するときの物差しが必要です。またこれは、看護を展開していくときにチームで共通に使う物差しの発想であると捉えていくと、『看護覚え書』のサブタイトルにナイチンゲールが表現したもののこそ、近代看護の原点、1860年を近代看護創始元年ということができ、その裏づけになる発想ではないかと思っています。

それゆえ、『看護覚え書』の価値は、人類史上初めて看護とは何かという定義が表現されたところにあります。ナイチンゲール以前にも看護という行為はありましたが、専門職業化されたことも教育されたこともありませんでした。職業看護は、ナイチンゲールによって初めて開始されます。そして教育がスタートしたわけですね。

そこでテキストのようなものが必要だったことでしょう。そのテキストに使われていたかどうかはわかりませんが、テキストに近いものが『看護覚え書』です。その中に人類史上初めて看護の定義が記載されたのですからナイチンゲールの業績は、ここに集約できると思います。

2) 看護の発見者としてのナイチンゲール

その後、(私の研究の結果として)ナイチンゲールが表現した看護の定義を乗り越えたナースは世界中に一人もいません。したがってナイチンゲールが提案した看護の定義をいまでも継承し、使うことができるとしています。「身体内部の状態を見極めて、その身体の中に自然治癒力が発動できるように、人的環境を含めたあらゆる環境条件をベストコンディションに整える」というのがナイチンゲールの看護の捉え方です。正にナイチンゲールは、看護を発見した人であるということになるかと思っています。これが二つ目のナイチンゲールの顔です。

3) 病院建築家としてのナイチンゲール

ナイチンゲールは『病院覚え書』を書きました。初版本が1858年、改訂版は、1863年発行の非常に分厚い本です。これも翻訳されて『ナイチンゲール著作集』に収められています。

『病院覚え書』の冒頭の言葉は、「病院が備えているべき第一の条件は、病院は患者に害を与えないことである」というものです。今では当たり前のことですが、

当時は病院の不潔さゆえに患者さんたちは自らの病気以外の二次感染で亡くなっていきました。ですから、病院に入った患者さんは、二次感染で殺されてはならないという表現とイコールになります。また病院内での感染率が高かったことを言っているのだと思います。

ナイチンゲールは病院の改革に乗り出し、組織改革、最終的には病院建築そのものを手がけていきました。彼女は自分自身で設計図を引いて建てさせています。図16は聖トマス病院を手がけたときに、彼女が自らつくったナイチンゲール病棟の構造です。パビリオン方式といって低層階の建物を並べていくわけですが、これが一つのモデルです。

右側が入口で、に入った左手に婦長さんの部屋とリネン庫があって、大部屋に行く手前が個室です。に入った右手にリフトがあり、その先が台所になっていて、大部屋に入っていきます。左右に15床ずつベッドが並び、一つのベッドに一つの窓がつけられています。200畳ぐらいの大部屋で、間仕切りなしです。天井が高く、三層の窓がつけられています。

真ん中がナースステーションですが、ちょっと高めのカウンターに囲まれた感じです。ナースたちはここで書き物をしたりしていますが、立ってぐるりと体を回転させると、患者さん全体が見渡せるようになっていきます。患者さんから見てもナースがいまどこで何をしているかが一目瞭然です。この病棟の中での患者の暮らしはきわめて快適であるという評価が出されています。突き当たりの左手はトイレと汚物室で、バルコニーを挟んで右手が簡単な風呂場とシャワー室になっています。

ナイチンゲールが考えた病院は、第一に換気システムがいいことです。二次感染を防ぎ、病院が患者さんにとって最も住みやすいところであるようにという発想が土台

にあります。この病棟がつけられたのは1876年です。

そのころ日本人のドクターの高木兼寛先生が、ナイチンゲールがつくった医学校に留学して、この病棟も見学しています。高木先生は6年間の留学から戻って、現在の東京慈恵会医科大学をつくり、そこに看護学校もつくりました。最初の慈恵医大の病院は、まさにこの建物だったそうです。

『病院覚え書』(Notes on Hospitals)という書物は、日本あるいは世界における病院建築家の間では有名な本です。東大工学部建築学の先生には“Notes on Hospitals”の研究者がいらっしやいます。ナイチンゲールが書いた『病院覚え書』は、かなりのレベルで病院建築家たちに読まれ、今日に引き継がれているのです。

ナイチンゲールは1ベッド当たり約6畳が必要であると必要面積と必要な空間を計算しました。特に個室は6.5畳ぐらいが必要であると言いました。そうでなければ、感染という問題が起こると考えたようです。それから病棟と病棟、建物と建物の間をどれぐらい空けたらいいか等、細かい数値を出しています。

また、『病院覚え書』では、病院は文明にとって絶対必要条件ではないと言っています。「内科的ないし外科的治療処置が絶対に必要である時期が過ぎたならば、いかなる患者も1日たりとも長く病院にとどまるべきではない。これは例外のない法則である」。現在の日本の在院日数短縮の裏づけにもなるような考え方です。

病院は治療の場であるので、生活の場として長く使っ

てはいけません。必要な治療処置が済んだら即座に退院させる。そして、退院してもすぐに家に帰れない人たちのために中間施設をつくっています。いまの老健と同じ発想です。日本の老健は高齢者だけの施設ですが、当時は子どもたちも含めてすべての患者さんは中間施設に入

って、そして家庭に戻っていきなさいと言いました。明治政府はヨーロッパの病院とドクターやナースのシステムをそっくりそのまま日本に導入しましたが、中間施設の発想までは入れませんでした。残念なことです。

ナイチンゲールは、病院についてこのようにも考えていました。「病院というものはあくまでも文明の途中のひとつの段階を示しているにすぎない。(……)究極の目的はすべての病人を家庭で看護することである」。現在の地域医療や在宅ケア、あるいは訪問看護が、すでにきちんと語られていて、なおかつ訪問看護ステーション、

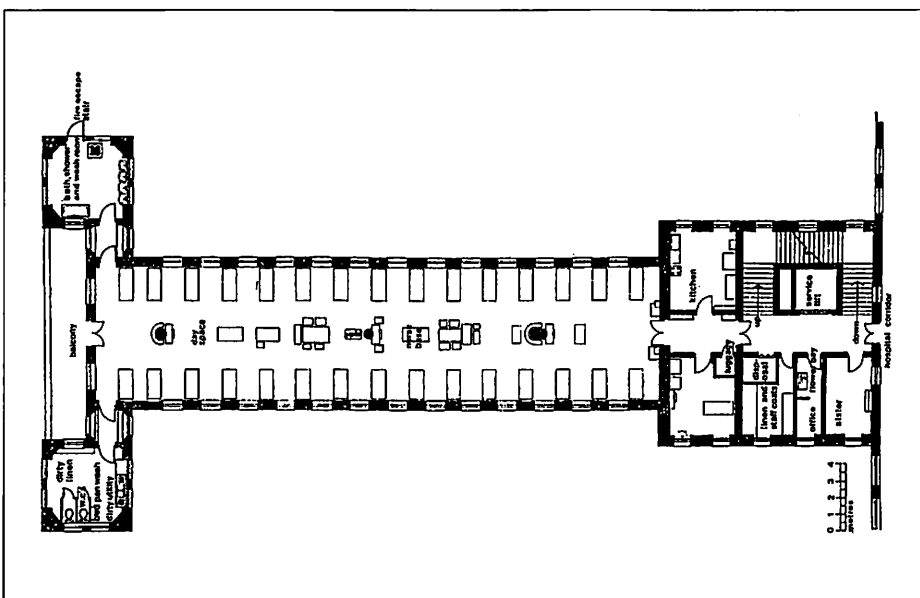


図16 ナイチンゲール病棟の構造¹⁾

訪問看護の活動母体が、ナイチンゲールによって始められました。District Nurse、地区看護婦と訳されています。

4) 統計学者としてのナイチンゲール

『英国陸軍における死亡率』は1858年に発表されました。ナイチンゲールがクリミアから帰ってきたのは1856年ですが、クリミアでは死なせなくてもいい兵士たち、患者さんたちをたくさん死なせてしまった。この悔悟の思いを何とか陸軍省に伝えなければいけない。しかもきちんとした裏づけをもって伝えなければいけない。そこで統計表をつくりながら、その当時の陸軍病院と兵士たちの命がいかに粗末にされたかということを訴えました。

このテーマについて、日本では統計学者としてのナイチンゲールというテーマで論文を書いた方が2人います。その一人の多尾清子先生の文献を引用させていただきました。図17はナイチンゲールが作りしましたが、黒い帯は兵役年齢に達した健康な男子の死亡率です。白い帯は国内および国外の陸軍の下士官および兵士の死亡率です。健康な人間が、徴兵制ではなく希望して行きますが、兵士たちの死亡率が圧倒的に高いことをまずグラフで示しています。

図18には三つの円があります。真ん中の円がマンチェスターにおける死亡率です。円の中心に直径2〜3mm

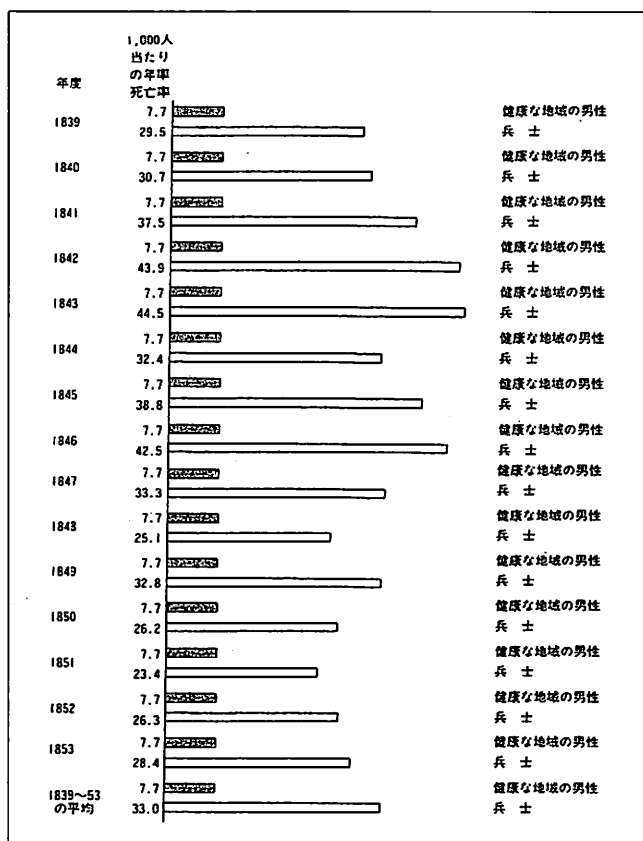


図17 健康な男子と兵士の死亡率の比較²⁾

の黒い小さな円がありますが、それがマンチェスターの死亡率を示しています。マンチェスターは工業地帯で、当時のイギリスで最も死亡率が高いといわれた都市です。その状況をクリミアの兵士たちの死亡率と比較したのが左と右の円です。右は最初の年、左は戦争が終結に至った年です。右のグラフは、マンチェスターの死亡率を円の中心の2〜3mmにして同じ確率で死亡率を出していった、クリミア戦争が起こった最初の1年間はそのすごい死亡率だったことがわかるように、ナイチンゲールが工夫してつくったグラフで、バットマップ(コウモリの図)といわれているものです。この図を陸軍省に出して、いかにひどい状態であったかをわからせようとした。

図19も同じ考え方で、真ん中の濃い黒い部分は、戦争による負傷のために亡くなった人たちです。ですから銃撃戦などの戦争そのものによって亡くなった人は大した数ではありません。その次の濃い灰色は、戦争と感染症以外の病気などで亡くなった人です。そして一番面積が広い薄い灰色は感染症で亡くなった人たちです。1,000人を単位にしていますので、そこは気をつけてご覧ください。ナイチンゲールは、兵士たちの大半が負傷ではなく病気、特に感染症によって亡くなっていったことを示したかったわけです。

その原因を彼女は考察しています。感染症がこれだけ戦地で起こった理由は、その主なものに空気の問題が挙げられると……。空気の問題=過密な人口密度に着目しています。図20は蜂の巣のようになっていますが、点が人間1人を表し、六角形が人間1人が占める空間面積を表し、点線は人と人との距離を表しています。下の右が健康な暮らしを営んでいるロンドン市民の1人当たりの

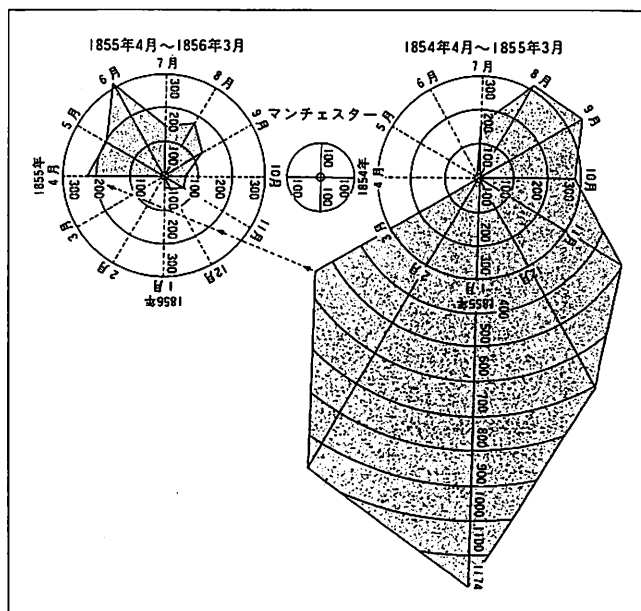


図18 マンチェスター工業地帯と兵士の死亡率の比較³⁾

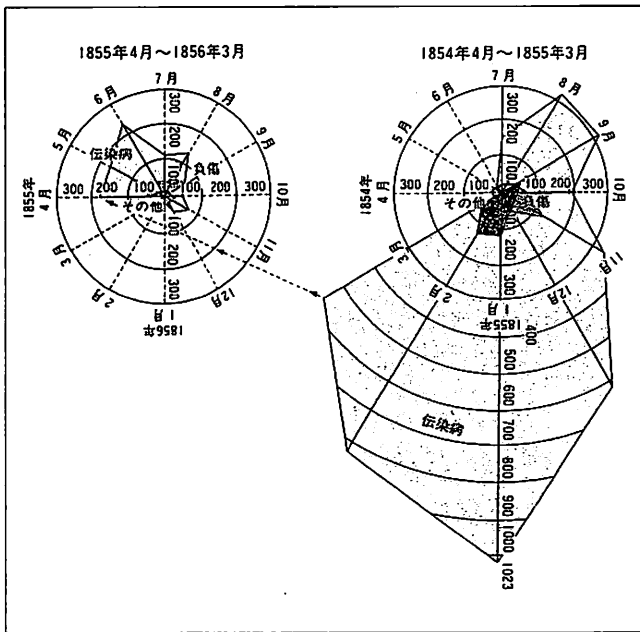


図19 戦争による負傷と戦争と感染症、感染症の死亡率の比較⁴⁾

空間です。下の左は同じロンドンですが、空気が悪いといわれた過密地域のイースト・ロンドンです。上は兵士たちの人口密度です。一番右の図はものすごく過密であることがわかります。そういうところで感染が起きている、つまり発病していることを証明しています。

ナイチンゲールはこうした図を自分で考案しながら訴えていきますが、伝染病が広がっているところは、必ず人口の過密状態があると考えています。そこから翻って、健康に暮らすための病院設計のあり方を考えていきました。病院の1ベッド当たりの空間をどれぐらいにしたらいいか、1人当たりが占有する空間をどれぐらいにしたらいいかということを、こういう裏づけをベースにして決めていったわけです。

ナイチンゲールは報告書において、調査の結果をすべて統計表にまとめ、グラフに描き直して、政府に提案していきました。とにかく情報を収集して、分析して、報告書を書く。これが1回だけ、1ページだけではなく、数千ページに及び、いくつかのテーマに及んでいたというのがナイチンゲールのクリミアから帰ってきてからの大きな仕事だったということを忘れてはなりません。

5) 衛生学者としてのナイチンゲール

ロンドンに有名なウェルコム・ライブラリー(Wellcome Institute for the History of Medicine)があって、その2階の手すりの下に著名な科学者の名前が刻まれています。そこにリスターとレントゲンに挟まってナイチンゲールという名前があります。ナイチンゲールは看護師としてではなく、衛生改革者として名前が残っている証拠です。

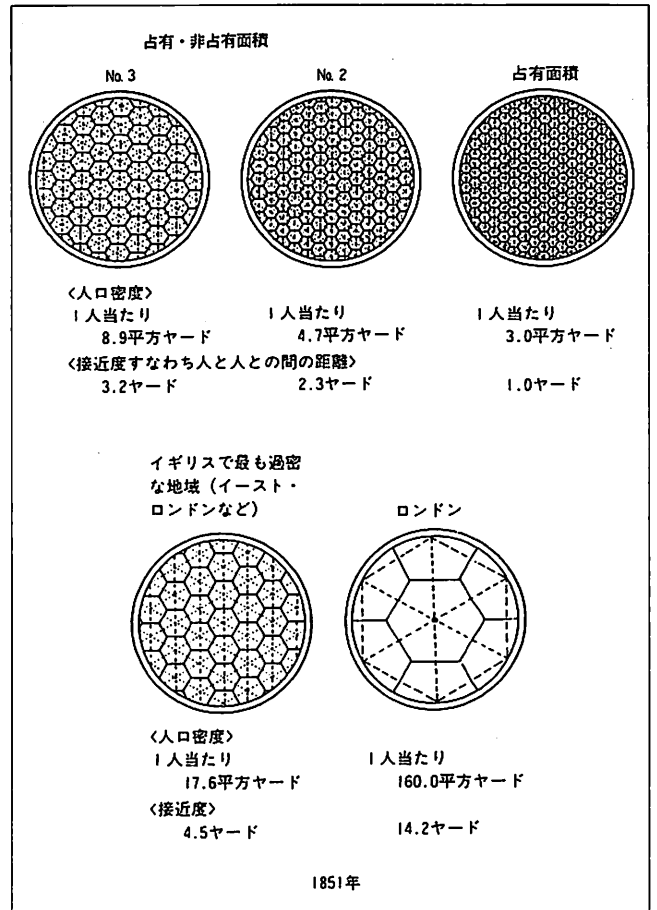


図20 人間1人が占める空間面積の比較⁵⁾

ナイチンゲールと感染制御

『看護覚え書』が書かれた1860年は、コッホが結核菌を発見し、病原菌がベースにあって感染が起こり発病し、その治療法が確立された時代の20年も前のことです。その時代にナイチンゲールはすでに感染に対して向き合っていました。

ナイチンゲールは、病気を「まずはじめに、病気とは何かについての見方をはっきりさせよう。すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程であって、必ずしも苦痛を伴うものではないのである。つまり病気とは、毒されたり衰えたりする過程を癒そうとする自然の努力の現れであり、それは何週間も何カ月も、ときには何年も以前から気づかれずに体内で始まっていて、このように進んできた以前からの過程の、そのときどきの結果、生活の結果として現れたのが病気という現象なのである」と捉えています。

さらに『看護覚え書』の「はじめに」で、「日々の健康上の知識や看護の知識は、(……)専門家のみが身につける医学知識とははっきり区別されるものである」

と断言しています。近代看護創始元年のナイチンゲールの言葉です。ここから近代看護が始まりました。つまり看護の知識は医学知識とははっきりと区別させるようにして展開していかなければいけないと断言し、その根拠は、病気の捉え方を看護的にしよう、生活を重視していこうと訴えたのです。潜伏期のような発想がすでにこの中に記されていることがわかるかと思えます。

病気の捉え方については、「病気とは、私たちが自ら招いてしまったある状態に対する、自然の思いやりのこもったはたらきであると考えられないだろうか」と論じています。病気というのは、生活の中で無理をしたり、あるいは環境が苛酷であったりすると体自身がそれに対抗しようとして働いている、つまり自然治癒力の発動の姿の現れではないか、結果的にはそうした環境条件を整えていくところに、看護の目をしっかりと据えていかなければいけないと言っているわけです。

病気は、体の中に宿っている自然治癒力が発動している状態であって、発病するかどうかはわからないということまで言っています。感染における潜伏期という発想を持っていました。

当時の感染や伝染病に対する一般的な見解は、患者や患者が身にまとっているものに触れるとうつるという発想で、ものすごく怖がられていました。このテーマについては「私たちは、日常使う言葉で〔病気の〕〔感染〕といわれているものを軽視してはならない。しかし、人びとは一般に、これを恐れるあまり、かえって感染について実は避けなければならないことを行ってしまう」と如実に書いています。つまり同じ病気になった人を一部屋に閉じ込めて、接触しないようにしてしまうことは、むしろもっと悪くしてしまうのではないか、ケアとしては反対ではないかと言っているのです。伝染することは確かですが、触るから伝染するということではないと強調しています。

そして、感染は空気の汚れから起こるものであり、感染は予防することができるという強い考え方を持っていました。空気の汚れ、特に過密が病気の感染をむしろ拡大していくと言っています。「感染は空気を通して行われる。人間が呼吸している空気が汚れると感染が起こ

る」と空気に大きな関心を示しているのがわかります。

感染を制御するための方策として、当時ナイチンゲールは5つの点を強調していました。まず、①開け放した窓から新鮮な空気を取り入れること。空気が新鮮であることが条件ですが、とにかく換気という点を大事にしました。②部屋の清潔を保つこと、③陽光を取り込むこと、④ひとつ屋根のもとに多数の病人を密集させないこと。過密という点が最もいけないと言っています。⑤寒がらせないこと、つまり室温をあまり下げない。この5点が当時のナイチンゲールの提案でした。

以上のことから、ナイチンゲールという人はクリミアから帰ってきてから50年間、自分の生涯を国の衛生問題、植民地の衛生問題、国民の健康の実現というテーマに命をかけて取り組んだ人であることがわかりいただけたと思います。

感染に対するナイチンゲールの見解は、①病原体発見のかなり以前から潜伏期という発想を持っていたこと、②病原体は人間の生活環境の中には常時存在するというのは、いまでは常識ですが、発症につながる生活空間が問題となるとかなり強調しました。③新鮮な空気が存在しない場所、過密な人口密度、免疫力の低下が発症を促進する。免疫力という言葉を使っていますが、それに近い表現がたくさんありますので、まとめるとこういうことになると思います。

この発想は、21世紀、今日の私たちが医療従事者として考えていかなければいけない最も基本的なテーマと重なっているように思われます。

参考文献

- 1) ウィリアム タットン・ブラウン (パナラクス綵子他訳)：ナイチンゲールの恩恵Ⅱ。総合看護 14(4)：49, 1979.
- 2) 多尾清子：統計学者としてのナイチンゲール。医学書院、東京、p44, 1999.
- 3) 多尾清子：統計学者としてのナイチンゲール。医学書院、東京、p51, 1999.
- 4) 多尾清子：統計学者としてのナイチンゲール。医学書院、東京、p55, 1999.
- 5) 多尾清子：統計学者としてのナイチンゲール。医学書院、東京、p58, 1999.